

革命の英雄たちを祭るのは、革命的情熱の源泉であり、生きている者たちの義務と責任であり、人間としての生きざまである！

書記長 森 久

「列席の同志の皆さん！ 本日の『二〇一四年度革命英雄記念祭』に、遠路かけ付けた党員の皆さんに、心からの感謝と、お礼を申しあげます。

皆さんの前に、気高くもそびえ立っているこの革命英雄記念碑は、日本革命運動の歴史の証言であり、革命的伝統のシンボルであり、生命を共にする革命集団の誓いの旗印であります。

二〇一四年度、今年の革命英雄記念祭は世界を見渡せばお分かりのとおり、歴史の大転換というすばらしい歴史時代の中で開催されています。

現代資本主義は世界的規模において混沌と混乱と迷走に陥っています。アメリカの一極支配は終わり、世界が無極状態になり、経済・政治・社会のすべての分野にわたってあらゆる矛盾が爆発しています。

日本経済新聞の滝田洋一編集委員は三月十日付の同紙に長いスペースを割いて「世界を襲う『無重力』の連鎖」という見出しで論説を発表していますが、それはわれわれの歴史時代認識の正しさを証言するものであります。その証言の核心を紹介すれば次の通りであります。

「何かムズムズする。ウクライナ情勢が典型だが、年明け以降、政治、経済の各領域で、どこに飛ばされるか分からないような事態が連鎖しているからだ。…」

中国は新冷戦をほくそ笑み、孤立したロシアに手をさしのべる。国際政治の専門家はそんな漁夫の利を指摘するが、そうだろうか。89年の東欧民主化や11年のアラブの春の例からも、民主化や民族解放の動きは瞬時に思わぬところに広がる。

最も酷薄な人権抑圧体制である北朝鮮や国内に深刻な少数民族問題を抱える中国は、ウクライナの春に心穏やかではいられない。

中国の場合、成長の高さが国内の七難を隠して

きた。だがシャドローバンキング（影の銀行）に示される金融のきしみや経済成長の鈍化が、社会全体に長い影を落としつつある。…」

シドニーでの20カ国（G20）財務相・中央銀行総裁会議の開催から1週間もたないうちに説明のないまま大量介入が実施された。その事実が厳然として残る。

G7・G8体制は、先進国主導の経済が08年のリーマン危機で失速した時点で壁に当たっていた。…」

大統領が「世界の警察官役を降りる」と明言した米国は、中間選挙を控え一段と内向きになっている。大統領は3月6日になって限定的な対ロ制裁を発動したが、いかにも及び腰で、ロシアの行動を変えさせることはできないだろう。

米政治アナリスト、イアン・ブレマー氏のいう指導国なきGゼロの世界こそ、ゼロ・グラビティ（無重力）を生み出している。お節介といわれながらまとめ役となっていた街の顔、つまり米国が家に引きこもってしまったことで、街中はタガが外れたかのようなだ。

安倍晋三首相は「地球儀を俯瞰（ふかん）する外交」を掲げる。その地球が無重力状態になったとすれば……。功を求めめる前に深手を負わぬ細心な手綱さばきこそが求められる。」

滝田氏の論説は現代の歴史時代を見事に表現しています。ウクライナ・クリミア危機は、まさにアメリカの一極支配の終了、無極（Gゼロ）時代の出現という現代の歴史が生み出した象徴的事件であります。

同志の皆さん！

歴史科学の必然性とは、生産力の発展が生産関係を変化させるということであります。それは人類の歴史を一貫して貫いている「生産力の発展が

生産関係を規定していく」という科学法則であり
ます。独占と帝国主義に到達した歴史時代は、つ
いに人類の前史を終わり、新しい時代としてのコ
ミュニティーへと前進する偉大な歴史であります。
歴史はけつして元には戻らず、前へ前へと進むも
のであり、ここに科学的法則があります。

同志の皆さん！

このような新しい時代と、歴史時代の中で、今
年の革命英雄記念祭が開かれています。私は、改
めて、わが行動派の科学的歴史観の正しさ、人
民戦線の科学的な展望に対し、限らない確信と信
頼を呼びかけます。

**「三・一五」、「四・一六」を記念して、
毎年一回革命英雄記念祭を挙げる
意義について！**

さて皆さん、わが党は中央の決定として、毎年
四月に革命英雄記念祭を挙げています。それは
つまり、わが党の歴史上、敵ブルジョア権力が日
本共産党に加えた最大の弾圧たる「三・一五」と
「四・一六」の両事件を記念しつつ、この凶暴な
弾圧にもかかわらず、わが党は不滅であり、歴史
が前進し、民主主義と社会主義は必然であるとい
う確信を内外に宣言するため、そして党の革命的
伝統をたたえ、革命の英雄たちをたたえ、いつそ
う団結して革命運動を推しすすめるため、偉大な
革命の党を建設せんがため、このために、毎年四
月に記念祭を開催しているのであります。

「三・一五」とは何か。一九二八年（昭和三年）
の三月十五日、日本政府は全国の検事局を総動員
して日本共産党に襲いかかったのであります。こ
の日全国的に共産党員の家、共産党の事務所、ま
た共産党の支持・協力者の家が急襲され、合計千
六百人余の人びとが逮捕・投獄されました。それ
は歴史上最大の弾圧であり、最大の逮捕者でした。
翌年の一九二九年（昭和四年）四月十六日に、
再び日本政府は検事局を動員、日本共産党に襲い
かかり、八百二十五名の大量の共産党員を投獄・
起訴したのであります。

この二つの大弾圧によって、日本共産党はその
指導部を全部失ってしまい、指導部は獄中にあり、
一九四五年に日本帝国主義が第二次世界大戦に敗
れ、徳田球一が十八年の獄中から出獄して党を再
組織するまで、個々の党員は指導部なしにバラバ
ラの闘争をしなければならなかったという、その
ような大弾圧だったのであります。

「三・一五」と「四・一六」の本質と教訓の最
大のものこそ、マルクス・レーニン主義は不滅で
あり、日本共産党は不滅であり、革命運動と階級
闘争は不敗であり、民主主義と社会主義の勝利は
歴史の必然である、ということでもあります。

日本共産党は、獄中十八年の苦闘を通じて鍛え
られ、一九四五年には再び、再組織された日本共
産党として人民闘争の先頭に立つに至りました。

日本共産党は徳田球一の死後、宮本修正主義に
よって党中央が毒されてしまいました。やがて
党は行動派の党として一九八〇年七月十五日に再
建されました。わが党は弾圧という外からの攻撃
にも負けず、また修正主義の支配という中からの
攻撃にも負けず、ここに立派に生き続けています。

労働者階級と階級闘争、そして共産党は、弾圧
によってつぶれはしない。逆に弾圧によって党は
鍛えられ、訓練され、訓練の中からもたくましく成
長、前進、発展するのであります。

同志の皆さん！

生あるものはいつかは死す。だが、人類社会と
この宇宙は無限に発展していく。人類社会は過去
から現代へと同じように、未来に向かって前進す
る。未来は共産主義のものであり、この道への前
進は闘争が切り開いていく。われわれは永遠に生
き抜くことができる偉大で光栄ある生涯としての
この道を進もう。こうしてのみ、徳田球一、渡辺
政之輔、市川正一と共に、われわれもまた永遠に
不滅である。

**“われわれは何者か”をもう一度革
命英雄記念碑の前で確認しよう！**

わが党は一般的（基本的）には正統マルクス主
義の党であり、特殊的に（日本において）は大武
思想の党であります。それは国際マルクス主義運
動の歴史、日本共産主義運動の歴史、そして現代
の歴史時代がこのことを決定づけました。

国際的には、フルシチョフが出現して「スター
リン批判」を展開したその瞬間から、われわれは
一貫して、これはマルクス主義の哲学原理に違反
しており、そしてこれは早くからレーニンが警告
していたとおり、まさにフルシチョフは修正主義
的裏切り者であると断定、以後一貫してこれと闘
ってきました。

国内的には、日本共産党に宮本修正主義が出現、
党の創立者徳田球一を否定したその瞬間から、こ
こに日本における修正主義があると断定、以後一

貫してこれと闘ってきました。そして徳田球一が創建した「獄中十八年・非転向」という日本共産党の不屈の革命精神と革命的伝統を守り抜きました。それは日本共産党（行動派）歴史年表を見ればわかるとおりであります。

中国における文化大革命が日本共産主義運動に刺激をあたえ、日本国内に「文革左派」が発生したとき、中国共産党のあるチームからわれわれに一定の要求（左派連合）があったとき、われわれはマルクス主義の理論上の原則にもとづきこれを拒否しました。その後の歴史はわれわれが正しかったことを証明したのであります。

そして今日、イラク戦争が発生したとき、この帝国主義戦争はアメリカ帝国主義を崩壊へ導くだろうと予告しました。こう主張したのはわれわれだけでしたが、現代の歴史がその正しさを完全に証明しています。

われわれは常に、一貫して、正統マルクス主義とその理論上（思想上）の原理、理念、原則を守り通し、それを止揚しつづけました。マルクス主義の歴史と現代史がわれわれの正しさを立証しています。そしてこれらの闘いと運動においては常に大武礼一郎議長を中心に全党が統一し、団結し、結束しました。ここにわれわれの誇り、われわれの確信と信念があり、そしてこのような歴史が、科学的証明として「わが党は正統マルクス主義の党であり、大武思想の党である」ことを決定づけたのであります。

革命英雄記念碑の碑誌にささげるわれわれの誓い！

同志の皆さん！ 私は本日も列席の皆さんと、そして皆さんを通じて、すべての革命家と労働者階級、人民と共に、この革命英雄記念碑に誓いを立てたいと思います。

同志の皆さん、 この革命英雄記念碑を仰ぎ見る度にぜひ『碑誌』を繰り返し、お読みいただきたい。そしてその度に、三賢人や、入魂者の姿を思い出していただきたい。大武礼一郎議長による碑誌は次のように言っています。

『日本共産党の創立者・徳田球一、そして日本共産党の革命的行動派として、草創期の党をみちびいた徳田球一、渡辺政之輔、市川正一の三賢人がここに眠る。』

また三賢人と共に闘った人びと、三賢人がのこした偉大な革命的伝統を復活させて再建された日

本共産党（行動派）、この偉大な党と共に闘った人びと、すなわち日本革命に身を捧げた偉大な共産主義者と革命的行動派の英雄たちがここに眠る。われわれは歴史を尊重しなければならない。革命運動は永遠の過去から永遠の未来に向かって前進し発展しつづける巨大な流れである。そして人間は歴史的条件が成熟して提起された問題だけを解決する。歴史的条件の成熟していない問題や、歴史的な制約のある問題を解決することは不可能である。そしてまた歴史的に未解決のこの問題を解決するものこそ党と革命の後継者でなければならない。

われわれはこのような偉大で光栄ある後継者がはたさなければならぬ任務に全力をあげ、力を合わせて実現しようではないか。歴史が与えたこの問題に対するわれわれの姿勢は感謝であり、これを実現することへの誇りであり、必ず勝利するということへの不動の確信と信念である。

先人と後人をふくめてわが革命集団は、闘う集団であり、一大家族の集団である。わが一大家族はこの革命英雄記念碑のもと、永遠に一体である。わが旗じるし革命英雄記念碑万歳！』

最後にわが行動派党のスローガンを提起し、報告を終わります。

- ▼われわれは正統マルクス主義者である。そしてわれわれはその日本における唯一の党、大武思想と行動派党である！
- ▼われわれは哲学・科学の統一された絶対的真理を堅持した、人民と歴史の進路を導く灯台、羅針盤、道しるべである！
- ▼われわれは歴史の要求と、人民の要求と、運動と闘いの要求にもとづいて存在しているのであり、歴史が必然性に到達するまで存在し、運動し、闘いつづける！
- ▼われわれの思想信条は、マルクスが愛したあの言葉「汝の道を行け、人には語るにまかせよ」である！
- ▼われわれは歴史の中から生まれ、歴史と共に存在し、歴史と共に永遠に不滅である！

（以上）